

「水産総合研究センター機能強化に向けた基本構想」の新旧対照表

修正案	原案
<p>4 効率的・戦略的な試験研究体制の構築</p> <p>(1) マネジメント機能の強化によるプロジェクト研究の積極的な推進や実用的な技術の開発</p> <p><u>①分野を跨がるプロジェクト研究の推進</u> 漁業生産現場の課題は、複数の要因が関与していることから、効率的及び効果的に試験研究を推進するには、特定の分野にとらわれることなく、複数の分野を有機的に結びつけたプロジェクト研究の強化が必要になっています。 そこで、研究マネジメントを強化することにより、分野を跨がるプロジェクト研究を積極的に推進するとともに、実用的な技術の開発に取り組みます。</p> <p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○効率的及び効果的な試験研究を推進するための研究マネジメント及びプロジェクト研究の強化 ○農林水産技術会議の研究推進体制の強化 <p><u>②競争的資金等の外部資金の獲得</u> 本県水産業が抱える様々な課題の解決に向け、未来にわたって試験研究を推進するには、競争的資金等の外部資金を積極的に獲得する必要があります。また、国立研究開発法人、大学及び同様な課題を抱える他都道府県の水産研究機関と連携した、広域的なプロジェクト研究の取組は、課題解決までの早期化が期待され、試験研究の効率化につながります。 そこで、競争的資金等の外部資金の獲得に向けて、研究開発推進会議や学会等において、水産研究に取り組む他の機関との情報交換をより一層活発化するとともに、広域的なプロジェクト研究を推進します。</p> <p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国立研究開発法人や大学との積極的な連携による外部資金の獲得 ○広域的なプロジェクト研究への参加による研究の効率化 ○競争的資金等の獲得に向けて適切にフォローアップする体制の整備 <p><u>③研究成果を現場で実用化させる研究の推進</u> 研究成果や開発した技術を、生産現場において実用化まで確実に結びつけるためには、ニーズの把握から研究課題の設定、研究成果や開発した技術の現場への普及までを一貫して、生産現場と連携を図りながら行うことが重要です。 そこで、<u>研究員や普及指導員と漁業者との連携による実証試験や調査、開発技術を活用した対策、商品開発など、より生産現場の実態に沿った課題の設定や適切な支援による技術移転を進めます。</u></p> <p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○研究員、普及指導員及び漁業者との連携による現地実証研究の推進 <p>(2) 最先端技術の導入による試験研究の高度化</p> <p style="text-align: center;">(中 略)</p> <p>(3) 研究技能と課題解決能力を備えた研究員の育成 <u>実用性の高い優れた研究成果を得るため、専門的研究技術の習得を図るとともに、プロジェクト研究や大学等の他の試験研究機関との共同研究などを通じ、研究スキルの向上や課題解決能力の高い研究職員を育成します。</u></p>	<p>4 効率的・戦略的な試験研究体制の構築</p> <p>(1) マネジメント機能の強化によるプロジェクト研究の積極的な推進や実用的な技術の開発 漁業生産現場の課題は、複数の要因が関与していることから、効率的及び効果的に試験研究を推進するには、特定の分野にとらわれることなく、複数の分野を有機的に結びつけたプロジェクト研究の強化が必要になっています。 また、研究成果を漁業生産現場での実用化まで確実に結びつけるには、普及指導員や漁業者との連携によって実証研究を行うなど、適切な支援による技術移転が必要になっています。 そこで、研究マネジメントを強化することにより、分野を跨がるプロジェクト研究を積極的に推進するとともに、実用的な技術の開発に取り組みます。</p> <p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○効率的及び効果的な試験研究を推進するための研究マネジメント及びプロジェクト研究の強化 ○研究員、普及指導員及び漁業者との連携による現地実証研究の推進 ○農林水産技術会議の研究推進体制の強化 <p>(2) 最先端技術の導入による試験研究の高度化</p> <p style="text-align: center;">(中 略)</p> <p>(3) 競争的資金等の外部資金の獲得に向けた支援体制の構築 本県水産業が抱える様々な課題の解決に向け、未来にわたって試験研究を推進するには、競争的資金等の外部資金を積極的に獲得する必要があります。また、国立研究開発法人、大学及び同様な課題を抱える他都道府県の水産研究機関と連携した、広域的なプロジェクト研究の取組は、課題解決までの早期化が期待され、</p>

修正案	原案
<p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○プロジェクト研究等への参画による先端技術の習得及び広い視野を持った研究者の育成 ○学会等での積極的な研究発表による研究者間の交流や情報交換の活発化 ○大学や他の研究機関で行われる研修や研究による課題解決能力の向上 <p style="text-align: center;">(中 略)</p> <p>【参考資料（語句説明）】</p> <p>①ファーストフィッシュ (p.4) ファーストフードのように手軽に食べられるように工夫された、調理に手間のかからない水産加工食や食べ方のこと。</p> <p>②ブランド化 (p.5) ブランド化とは、本県に水揚げされる水産物の付加価値を高め、消費者にその魅力を広く知ってもらうこと。</p> <p>③急潮 (p.7) 潮流や風などの変化の影響により沿岸域で突然流れが速くなる現象。時に沿岸に設置された定置網や養殖網に被害を与える。</p> <p>④バイオリギング (p.7) 生物に小型のセンサーなどを取り付けて画像やデータを記録し、行動や生態を調査する研究手法。</p> <p>⑤漁業生産性向上プラン (p.7) 漁業経営が成り立っていくように、資源を合理的に利用するとともに経費削減や魚価向上等を総合的に検討して、収益性を上げていくためのプロセス案を具体的に示したもの。</p> <p>⑥リアルタイム PCR (p.8) 魚病の診断には、病原体の DNA を検出する必要があるが、PCR 法により DNA を増幅した後、検出している。リアルタイム PCR 法は、増幅と検出を同時に行うことができるため、迅速な診断が可能となる。</p> <p>⑦着地検査 (p.8) 養殖用に輸入された水産動物について、仕向け先の養殖場において引き続き健康状態、移動について監視することを言う。検査の期間は養殖場に到着後、原則として概ね6か月間とされている。</p> <p>⑧低塩分微細粒子氷（スラリーアイス） (p.9) 微小な氷の粒子と海水が混ざり合ったシャーベット状の氷のことで、接触面積が大きいので冷却効率が高く、また、塩分調整により冷却温度を決められるので、凍る直前の温度管理により鮮魚の高鮮度保持流通が可能となる。</p> <p>⑨超微細気泡（ナノバブル） (p.9) ナノメートル(1/10⁶mm)単位の極微細な気泡のことで、長時間水中に残存し、細菌の増殖や酸化（魚肉の褐変）抑制等による鮮度保持効果がある。</p> <p>⑩HACCP（危害分析重要管理点） (p.9) 食中毒、異物混入などの危害を未然に防止するための食品衛生管理システム</p> <p>⑪増殖礁 (p.12) 産卵場や稚仔の保護・育成場の機能をもたせた魚礁のことで、増殖対象とする生物の習性に合わせて、材質・形状、設置場所等を設定する。</p>	<p>試験研究の効率化につながります。</p> <p>そこで、競争的資金等の外部資金の獲得に向けて、研究水準の向上に必要な研究者の積極的な育成を行い、研究開発推進会議や学会等において、水産研究に取り組む他の機関や研究者との情報交換をより一層活発化するとともに、広域的なプロジェクト研究の課題設定等への助言や共同研究契約の事務等を支援する体制を構築します。</p> <p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国立研究開発法人や大学との積極的な連携による外部資金の獲得 ○広域的なプロジェクト研究への参加による研究の効率化 ○学会等での積極的な研究成果発表による情報交換の活発化と研究者の育成 ○競争的資金等の獲得に向けて適切にフォローアップする体制の整備

修正案	原案
<p>⑫GIS (地理情報システム) 磯根漁場基本情報 (p.12) 磯根漁場図上に、海底地形、底質や海藻分布等と漁獲情報や調査結果に基づく対象生物の分布を、GPS による位置情報と組み合わせて表示するもので、漁業者が効率的に漁場を活用するための基本図となる。</p> <p>⑬貧酸素水塊 (p.13) 水中の酸素濃度が著しく低下した水塊のこと。主に植物プランクトンの死がいや有機物が海底で分解する際に酸素を消費することにより発生する。東京湾では表層と底層の海水が混ざりにくくなる春から秋に、毎年底層の広い範囲で発生する。貧酸素化が更に進行して酸素が全くなくなった無酸素の水塊となり沿岸に湧昇すると青潮となる。</p> <p>⑭栄養塩 (p.14) 海藻や植物プランクトンの生育に必要な栄養のことで、海水では特に窒素とリンが重要である。</p> <p>⑮カイヤドリウミグモ (p.15) アサリなどの二枚貝に寄生する節足動物。平成 19 年に木更津市地先盤洲で大量発生し、アサリの大量へい死の原因となった。その後、富津などほかの海域でも発生が見られるようになった。</p> <p>⑯再生産ネットワーク (p.15) 干潟に生息するアサリの親貝が産卵し、ふ化した浮遊幼生が他の干潟に流れ着き、成長し、産卵することが、多くの干潟で相互に行われること。</p> <p>⑰青混ぜノリ (p.15) ノリ (黒ノリ) に青ノリを混ぜて製品としたもの。香りが良く、高価で取引される。</p> <p>⑱データロガー (小型情報記録計) (p.19) センサーにより計測・収集した各種データを保存する記録装置のこと。</p>	